

NHKテレビテキスト

趣味DO楽

放送 Eテレ 毎週月曜日
午後 9:30-9:55

再放送 総合 翌日火曜日
午前 10:15-10:40

Eテレ 翌週月曜日
午前 11:30-11:55

10 OCT. 11
2012 NOV.

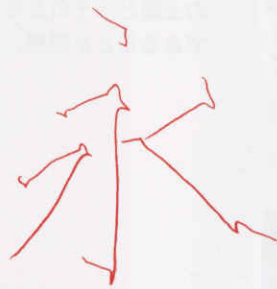
10月1日-11月26日(月曜)

柿沼康二
オレ流
書
の
冒
険



講師: 柿沼康二
Koji Kakinuma

楷書の「永」を臨書する



『中国法書選』
二玄社より

永字八法とは

楷書の基本点画の用筆法を説いたもの。中国の後漢時代から伝わるとされている。それぞれの点画には呼称があり（下を参照）、例えば側（点のこと）は「鳥が身を翻しながら急降下するように勢いよく斜めから打ち込む」といった意味を持つ。

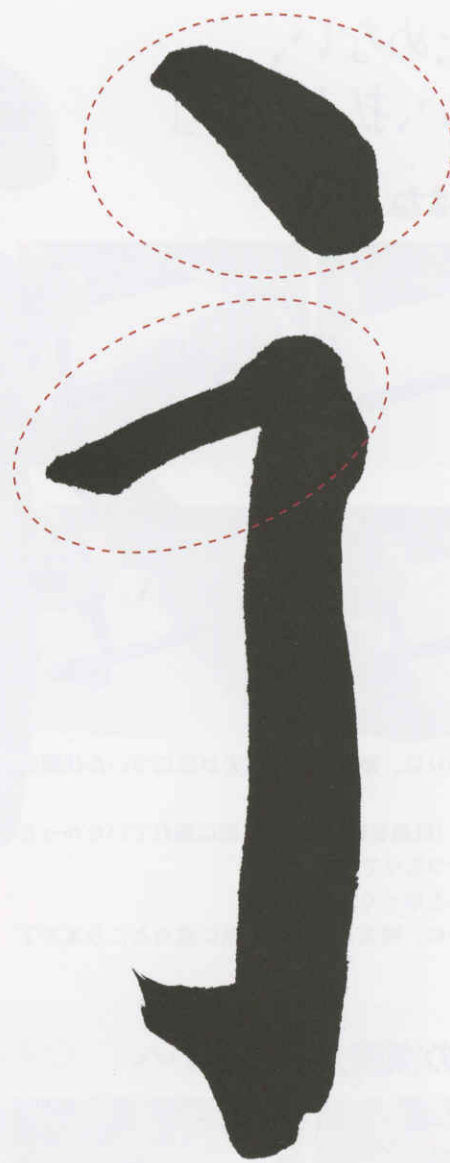


楷書は行書や草書に比べ、点画が明確で読みやすいのが特徴です。今回は、顔真卿の『多宝塔碑』（楷書の拓本。38ページ参照）から「永」、「千福」の順に文字を臨書していきましょう。

まずは楷書の基本線、横画と縦画を練習します。Kコードで書き方のポイントを確認しながら書き進んでください。

「永」には、点や横画、縦画、はね、はらいなど、基本点画が集約されています。書の世界には「永字八法」という言葉もありますが、厳密な解釈は難しいので、ここでは筆運びに慣れるつもりで取り組みましょう。

「永」を書く① 点、横画



K コード ……

「点は1点じゃない」



点

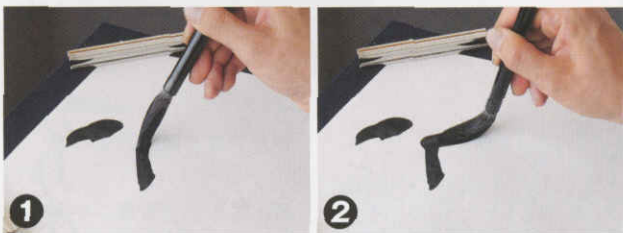
1 紙に穂を落とす前から筆を寝かせ気味にしておく。穂先から入って、少し右下に引く。

2 筆を立てながら穂先の方方向にゆっくりと引き上げる。



K コード ……

「転折、方向転換の要」



横画から縦画へ

1 左斜め30度くらいの位置から穂先を入れ、やや右上がりを書く。転折の前に筆を軽く上げ(写真)、穂を立てるようにする。穂先で少し書き進む。

2 穂を寝かせて、角を書く。

3 少し筆を持ち上げてバネを作りながら、縦画に移る。穂は紙から離れないが、2以降は新たに縦画を書く意識で行おう。

穂先を立てるときれいに書くことができるはず。
ゆっくり丁寧に書くほど、隅々に意識が行き届くので、速書きは避けましょう。

いよいよ「永」を臨書します。一画目の点から最後の右払いを書くまでに、わかりやすいよう点画で区切りながら、書き方を紹介していきます。

点は「穂先を入れてすぐに離すだけ」と受け止められがちですが、それでは書における点を書いたことにはなりません。点を書くにはいくつかの筆の動きがあります。

次のポイントは転折(こころ)は横画から縦画へ、穂を紙から離すことなく移行する箇所。転折にさしかかる前に、筆を持ち上げ、穂先を立てるときれいに書くことができるはず。

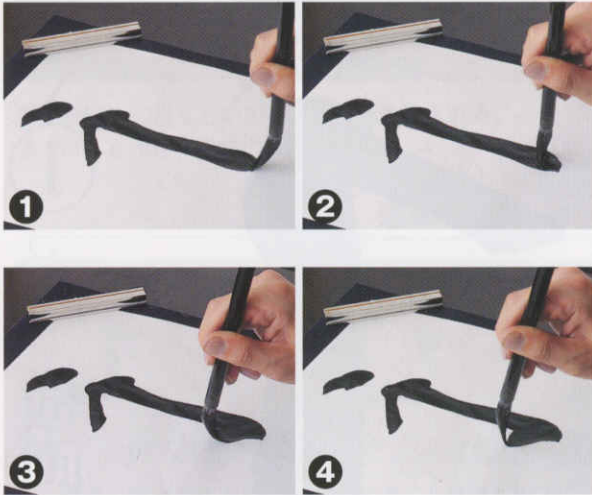
「永」を書く② 縦画、はね、右上がりの横画



Kコード ……

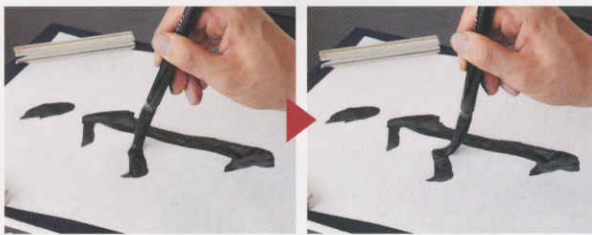
「筆は止めない、
はねない、払わない」

縦画からはね



- 1 縦画の終わりは、筆を立てて穂先が紙についた状態にする。
- 2 穂先を返す（縦画を書いたときに紙に触れていなかった側を紙に当てるつもりで行う）。
- 3 左斜め上へとゆっくり書き出す。
- 4 書き終わりに、穂先が最後まで紙に残るところまで丁寧に書く。

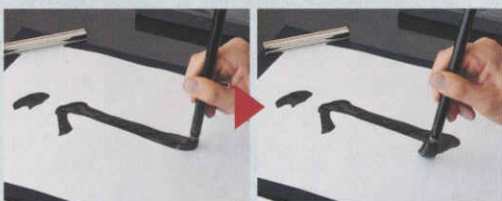
右上がりの横画から左払いへ



左斜め上70度くらいのイメージで穂先から入り、最初の横画よりも右肩上がりになるように書く。筆を軽く持ち上げ転折し、左払いに備える。

穂先を返さずにはねる

はねは、穂先を返さずに書く方法もある。どちらでも行えるように練習しよう。



縦画の終わりまで書いたら、最後に穂先が左上から抜けるようにして、そのまま筆を左上へと押し出す。

ポイントとは、はねをしつかりと書ききること。言葉のイメージどおりに勢いよくはねてしまうのでは、十分に筆をコントロールできないものです。横画、縦画（33、34ページ参照）においても、止めはそのままピタッと止まることなく、最後まで丁寧を書く必要がありました。考え方は、はねや払い（37ページ）も同様です。

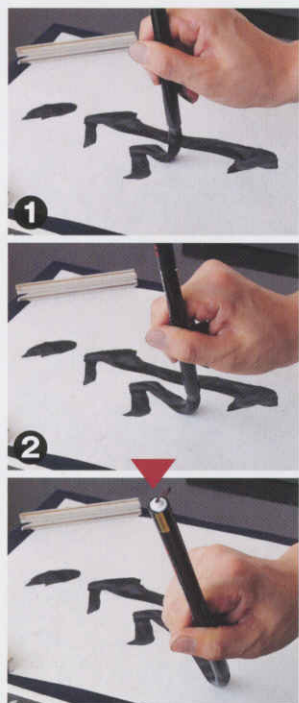
言葉のイメージどおりに筆を使わないこの状況を、柿沼さんは「書の矛盾」と言います。

「永」を書く③ 左払い、左払い、右払い

K コード ……

「右利きの弱点は左払い」

左払い

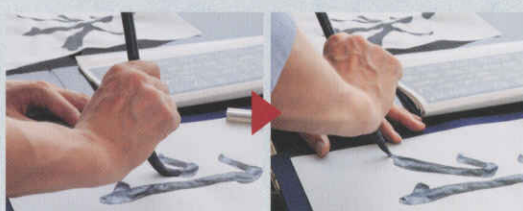


1 書き出しは筆を立て気味にする。

2 徐々に筆管を左下側（払いの方向）に傾けて書く。穂先がゆっくりと紙から離れるように筆を引き上げる。



別の視点から見てみよう

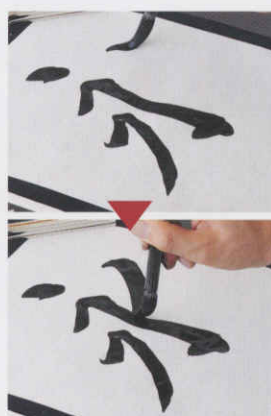


筆管の傾きがよりわかる。筆管を傾けて「永」の左払いを書くと、書き手本人には線が見えにくい。何度も練習して体にしみ込ませよう。



右払い

穂先から入り、右下へと書き出す。途中で軽く突くようにして穂を開き、ゆっくりと筆を持ち上げて最後まで書ききる。



左払い

前画の左払いほど筆管を傾ける必要はない。書いたらそのまま右払いに移ってもいいし、一度紙から離してもいい。

左払いの苦手な人は、右払いのような太い線を書いてしまいがちです。美しい左払いを書くコツは、筆管を傾けて筆をコントロールすること。慣れない人は、自分の手首の動きを意識しながら行うと書きやすいでしょう。